フランス南西部への旅—太古・中世・近代の遺跡を訪ねた私の妄想

蔭山　龍児

ラスコー

ラスコー洞窟は私の想像をはるかに凌駕するものであった。美しく生き生きとした生命が汪溢していた。これらの群像を描いた人たちはせいぜい小さな石の矢尻か石斧か、乏しい武器を手に猛々しく荒ぶる獣に命懸けで対峙し、傷を負い、時には命を失うこともあっただろう。獣の激しく生温かい息吹きにさらされ、熱い血潮も浴びたことだろう。獣の断末魔の苦しみをおのれの内部に刻んだことだろう。そしてこれらの獣たちが悠然と草を食み、広い大地に重々しい地響きを立てて疾走する姿を思い起こしたことだろう。だから慈しみを込めて描いたに違いない。彼らにはことさら模写する必要もなく、その線描には迷いが無い。それがたとえ頼りない足場の上であっても。続く篆刻、彩色の作業は、システィナ礼拝堂の天井画を描いたミケランジェロの労苦をはるかに凌ぐものがあったのは間違いない。敬意と慈しみを込めて“ああ、クロマニョンの人達よ！”とつぶやいてみる。

コンク

コンクの村の教会にある“聖女フォア”の遺骨のおかげで巡礼者たちも増え、賑わいを取り戻した。しかしこの遺骨は遠く離れた町アジャンの教会から盗み出したものである。しかも、あろうことか、コンクの教会の司祭と修道僧の陰謀、奸計によるものである。ある日突然に忍び込んで持ち去ったのではない。この計略の発案は司祭なのか修道僧なのか。アジャンの教会に入り込んだ修道僧は司祭の指示に嫌々従わされたのか、あるいは自らすすんで行ったのか。いずれにしろ 10 年の歳月を費やしてアジャンの教会の司祭や信徒の信頼をかち得たのである。言うまでもなくこの村人にとってはこころの依り処であり、日々祈りを捧げている聖女フォアである。10 年の歳月を経てこの村の宝物の世話と保全を任されるまでになった。その途端に彼は持ち去ったのである。こんなにひどい仕打ちがあろうか。アジャンでは血の涙を流して悲しんだことは間違いない。

オラドゥール

オラドゥールの村の入口はサビ色の鉄板で出来ている。これを抜けると静寂に包まれた一面灰色の村である。事が起こったのはわずか 74 年前である。この時私も生を受けて 4 歳であった。決して遠い過去ではない。その惨劇の場を歩きながら村民たちの悲鳴や絶望的な叫び声、侵入者の放つ銃撃音を想像し、何とかそれらを聴き取ろうと努めたものの私の鈍い頭、鈍なこころには何も応えなかった。

思えばこのオラドゥールからほんの 30 年前、第一次世界大戦においては“戦場にも人道を！”と唱えた A・デュナンの精神が生きていた。遠く離れた我が国でも“鳴門の第９”として記憶されているし（板東のドイツ人俘虜収容所）、それ以前の日露戦争では、マツヤマ！マツヤマ！と連呼しながら降伏してきたロシア人もいたという記録もある（松山のロシア人俘虜収容所）。にもかかわらず、先の大戦にあって、我が国の軍隊は近隣諸外国で数々の蛮行を重ね、その罪過を今も背負っている。わずか 30 年後のことである。堕落するのは早い。1945 年 8 月、ヒロシマに原爆が落とされたと聞いた赤十字国際委員会の M・ジュノー氏はジュネーヴを発ちシベリア経由で満州の日ソ国境を越える時、捕虜の待遇に関する調査が目的であると伝えたところ、これに立ち会った日本軍将校はウス笑いをしながら、我が日本は捕虜に関する条約を批准していないヨ、とあざけったという。道義も礼儀も無くしている様子が見える。